# 第一回中間報告
# (2015 年 9 月 5 日～12 月 18 日)

国際ロータリー第 2710 地区
2015-2016 年度 グローバル補助金奨学生
藤村 武蔵

1. 報告書提出日：2015 年 12 月 18 日 第 1 回報告

2. 基本情報

・氏名：藤村武蔵

・ 派遣ホストクラブ及びカウンセラー：岩国中央ロータリークラブ、Mr Hidenori FUJISHIGE

・ 受入ホストクラブ及びカウンセラー：Edgware and Stanmore Rotary Club, Ms. Maxine Offredy

ロンドンとユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン(以下、UCL)について

2015 年 9 月初旬に英国ロンドンに到着し、国際ロータリー第 2710 地区グローバル補助金奨学生としての留学生活が始まりました。私が勉強しているロンドンは言わずと知れた世界的大都市の一つであり、様々な人種、国籍、言語が飛び交う正に国際都市と言うに相応しい場所です。

私が勉強している UCL はオックスフォード大学、ケンブリッジ大学に次いで古い大学で、創設 185 年の歴史を持っています。ロンドン市内最初の大学であり、英国で始めて女子生徒を受け入れた高等教育機関としても有名です。伊藤博文が留学した大学としてもよく知られています。UCL は世界的に見ても非常に権威のある教育機関で、2015 年の QS ランキングでは世界第 7 位にランクされています。私は UCL の中でも教育学を専門に取り扱うインスティテュート・オブエジュケーション(以下、IOE)で国際教育開発学のコースを勉強しています。IOE は教育学を専門に研究する教育機関として非常に権威のある大学で、世界各国から教育に興味・関心のある学生が集まる大学院(大学院生が 9 割以上)です。大学の立地もロンドン市内の中心に位置しており、徒歩 10 分圏内に大英博物館があり非常に恵まれた環境で勉強することができます。

(UCL の概観)

学業面での成果

私の所属する国際教育開発学のコースは 9 月の下旬に第一回目のオリエンテーションがあり、10 月の初旬から本格的なコースが開始しました。カリキュラムの構成は 10 週間にわたる一連の授業で 1 モジュール(30 単位)が構成されており、1 学期目に 2 モジュール(60 単位)、2 学期目に 2 モジュール(60 単位)、3 学期目に修士論文(60 単位)の執筆、計 180 単位の取得を 1 年間で目指します。私は、1 学期目のモジュールとして、「Education and International Development: Concepts, Theories and Issues(以下、CTI)」と「Theories of Childhood and society(以下、TCS)」という計 2 つのモジュールを選択しました。以下、それぞれのモジュールごとに詳しく説明をさせていただきます。

**モジュール 1: CTI**

CTI は私が所属する国際教育開発学コースの必修モジュールとなっており、主に、国際教育開発学がどういった学問であるのか(コンセプト)、また実際に国際教育の分野で用いられている理論(セオリー)や実際に国際教育の現場で起こっている課題(イシュー)を学びます。計 10 回の授業で毎回異なる理論や課題を学び、それに基づいて少人数のグループでディスカッションを行

います。内容的には、国際協力の分野で働くにあたって必須となる知識を習得することが目的であるため、かなりジェネラルな内容になってはいますが、どの授業でもそれぞれの理論や課題をどう教育的側面から解決するのかに焦点が当てられており、国際協力分野の課題の教育的解決方法を学ぶことができます。

**モジュール 2: TCS**

TCS は私が所属するコース外のモジュールであり、私のコースからは履修する学生が少ないコースです。モジュールの内容としては、Childhood(子供時代)研究に焦点が当てられており、Childhood studies における様々な理論や、様々な国(先進国から発展途上国に至る)においてChildhood がどう見なされているのか、またそれらにはどういった共通点・相違点があるのかを学びます。私は個人的に子供の遊びに研究関心があり、紛争地域あるいは紛争後復興期における子供の遊びに焦点を当てた研究を修士論文で実施する予定であるため、このモジュールを履修することを決めました。計 10 回の授業を通して、子供の社会的な立ち位置や、それを構成している様々な理由、また国や地域が変われば子供の見なし方が大きく異なることを学問的に学ぶことで、今まであまりにも自然に見なしていた子供時代という概念が大きく覆されました。私は、常々「子供はどんな地域・場所にいても遊ぶ権利だけは保障されなくてはいけない」、という強い信念を持っています。この信念は今も変わりませんが、この考え方はもしかしたら途上国の人々にとっては“先進国の子供の概念”としか見なされないかもしれない、ということを強く意識することができました。この意識はこの分野で子供に携わって仕事をしていく上ではなくてはならない考え方であると思っています。

<u>受け入れ地区でのロータリーとの関わり、カウンセラーとの交流</u>

現地カウンセラーの Maxine さんは日本出国前から頻繁に連絡をとってくださり､何度かスカイプでお話する機会もいただきました。また私を空港まで迎えに来てくださり、到着初日の夜は彼女のご自宅に泊まらせていただきました。非常に健康的で快活な方で私の生活面・学業面での悩みを快く聞いてくださり、的確なアドバイスをしてくださいます。私の受け入れクラブである Edgware and Stanmore Rotary Club のみなさまとは到着して２週間目の９月 16 日にランチ・ミーティングでお会いし、今年度の奨学生として歓迎をしていただきました。９月 18 日から 20 日にかけては、イギリスの中央に位置する Warwick という都市で開催された 2015-2016 年度のロータリーの奨学生を歓迎する Link

(カウンセラーの Maxine さんと一緒に到着 2 日目の写真)

Weekend に参加させていただきました。Link Weekend には今年度にイギリス国内で(主に)修士過程を開始する計 40 名以上の奨学生が招待され、3 日間かけてロータリーの活動内容の紹介やイギリスの文化について、Warwick 城の観光、奨学生同士の交流の場が設けられました。私はこの 3 日間を現地ロータリアンピーターさんのご自宅に他 2 名の奨学生と共に宿泊させていただき、観光やイギリス人の実の生活を体験させていただきました。また 10 月 23 日から 25 日には、イギリス南部の都市 Eastbourne で開催された Rotary District 1130 Conference に参加させていただき、今年度の他の District1130 の奨学生とともにプレゼンテーションをさせていただきました。ロンドン市内のロータリー・クラブはすべて District1130 に所属しており、このカンファレンスには約 30 名弱の奨学生が参加しました。これら以外にも、District1130 の奨学生には多くの機会が設けられており、奨学生を集めたディナー・ミーティング等、月に 1 度は District1130 の奨学生で集まる機会を頂いています。このように頻繁に会う機会を作っていただいたおかげで、奨学生間の関係性も非常に密接になることができ、自身の大学ではない他の大学で全く異なる学問を学んでいる学生と密接な交流を持つことができています。私が受け入れロータリー・クラブでプレゼンテーションをさせていただく機会は 2016 年の 1 月の予定です。

(Conference に参加した奨学生と)

<u>直面した課題、問題点等</u>

一番課題を感じているのは自身の英語力です。特に授業中のディスカッションにおいて積極的に自分の意見を発信していくだけの英語力が十分ではないと痛感しています。特に初回の授業では、目の前でネイティブのクラスメイトが我れ先にと自分の意見を発現する場面を目の当たりにし、圧倒され全く一言も発することができませんでした。発現するだけではなく、その発現内容が非常に重要であることは当然のことですが、まずは自分がその場にいて、参加する意欲があること示すことが、この国では非常に重要な要素なのだなと痛感しました。もちろんこの課題は英語力だけではなく、文化的に授業のスタイルや授業に対する意識が欧米と日本とでは全く異なることは大きな壁として存在しますが、現在イギリスで学んでいる以上そういった壁を認識し、“どうすれば周りに貢献することができるのか”という意識のもとで授業に参加しなくてはいけないと感じています。

今後の課題、目標

１学期を終え少しずつではありますが、言葉の壁や現地の文化的な違いにも慣れることができてきました。今後第一に取り組まなければならないのは、修士論文の執筆に当たり実施するフィールドワークに協力してくれる団体を見つけることです。２学期目が終了した３月下旬から長期間かけて開発現場に赴き、フィールドワークを実施することを検討しています。私のコースにはフィールドワークが含まれていないため、フィールドワークを実施したい場合は自分で協力してくれる団体を見つけてこなくてはなりません。そのため 2 学期目は 1 学期以上に学外での活動に力を入れていきたいと考えています。